

非売品

ゲラ本

おやすみ前にブラッシング100回

メリッサ・P = 著
中村浩子 = 訳

2004年11月上旬刊行予定
予価 本体1200円(税別)
46変判／上製／176頁予定
ISBN4-309-20417-1



株式会社 河出書房新社

編集担当 木村由美子 Tel. 03-3404-8611

広報担当 岡垣重男 Tel. 03-3404-0337

刊行予定は、2004年11月上旬です。

〈ゲラ本〉

おやすみ前にブラッシング100回

メリッサ・P = 著
中村浩子 = 訳



株式会社 河出書房新社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

[URL] <http://www.kawade.co.jp/>

編集部 03-3404-8611 担当 木村由美子

広報課 03-3404-0337 担当 岡垣重男

製作課 03-3404-1531 担当 本村修治

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

発行日 2004年9月

©2004 Kawade Shobo Shinsha, Publishers

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での
例外を除いて禁止されています。

非売品

足りないのは愛
してもらいたい
ほしいのは
の
たまなざし
こと、



本書について

シチリア島。青い海と緑の丘に囲まれた美しい町カターニャに暮らすメリッサは、十四歳。自分に無関心な父親と、見たいものしか見ない母親。家庭も学校も、友情も男の子とのキスも、みんなにせものと感じる彼女は、心から愛されているという実感がほしい。心の氷が砕けて、美しい情熱の川となってあふれるところを見てみたいと願う。潮風の中をスクーターで駆け抜けてみても、メリッサの心が晴れることはない。そして、彼女は日記をつけようと思う。自分のほんとうの心を知るために――

あらゆるタイプの恋愛をつづったラディカルな内容と、美しい女子高生の自伝的小説であることが話題をよび、イタリア本国ではこの夏までに販売部数が九十万部を超え、今年翻訳刊行されたばかりのドイツでは、ひと月で二十万部を売り上げた。翻訳権取得は二十数か国に及ぶという、世界的な大ベストセラーである。

「かなり心がふさぐ、ひとつのおとぎ話である」（ラ・レブブリカ紙）と評されているように、この作品は、性愛のラビリンスに迷い込んだお姫さまが、悪魔や怪物の手から逃れて、ついに王子さまに出会う物語、というふうに読むこともできる。

満たされない孤独な心を抱えるこの現代のお姫さまが、真に「心のこもったまなざし」を探しつづけるうちにはまりこんでしまったセックスという深い穴。その中で、傷ついてもなお、真実の愛を求めて果敢に行動していく主人公の姿は、同年代はもちろんのこと、あらゆる世代の読者の共感をよぶことだろう。

過激な性愛の描写と、少女の無邪気さとが交互に現れ、不思議な魅力を醸す本書が、著者と同様、豊かな感受性をもつために、深い孤独を抱えざるを得ない多くの読者の心を潤すことを願って。

おやすみ前にブラッシング
100回

ア
ン
ナ
へ

2000年

7月6日

15:25

ダイアリー、

あなたを書いているのは、グスタフ・クリムトの絵とマレーネ・ディートリッヒのポスターを貼った薄暗い部屋。白い紙に走り書きするのを、ディートリッヒがさげすむような目で、すまして見つめている。その紙に、よろい戸のすきまをようやく通りぬけた日の光が反射する。

暑い。燃えるようなカラカラの暑さ。別の部屋からテレビの音が聞こえる。アニメのテーマソングを口ずさむ妹の声。おもてではコオロギがのんきな声を張り上げる。家の中は静かで、生ぬるい。何もかも内にこもって、薄いガラスの覆い^{おほ}に守られているみたい。暑さが動きをいちだんと鈍くする。なのに、わたしの心は落ち着かない。ねずみに心をカリカリとかじられているみたい。ほとんど気づかないようにかじられるから、甘く優しい感じもするほど。元気が

なくもないけど、元氣でもない。いらつくのは、自分が「どっちでもない」ってこと。けれど、どうすれば気持ちよくなるかは知っている。視線を上に向けて、鏡に映る自分と目を合わせる、うっとりした気分になるために。

鏡の前で、自分に見とれる。少しずつ曲線をおびる体、確かなふくらみ。セーターの上からもわかる乳房は、歩くたびに優しくゆれる。幼いころから、母は無邪気に裸で家歩きまわっていたから、女性の体を見るのには慣らされていた。だから、おとなの女性の体なんて神秘でもなんでもない。入りくんだ森みたいに陰毛があそこを隠している、見えないように。鏡に映った姿を見ながら、指をそつとすべりこませる。目を見ながら、自分がいとおしくなり、ほめ言葉をあげせたくなる。自分をじつと見つめるとあまりに気持ちよくて、体も気持ちよくなって、まずむずむずしてきて、しまいには体がほてってもぞもぞとしてくる。それが数秒つづく。そのあと、きまり悪さがやってくる。アレックスサンドラとはちがつて、体をさわりながら想像をふくらませたりはしない。このあいだ、彼女も自分の体にさわって、男の人に激しく、荒っぽく、痛いぐらいに求められるところを想像するのが好き、って言っていた。わたしは興奮するのに、自分をじつと見つめるだけでいいから、びっくりした。あんたもさわるのって聞かれたから、ううん、って答えた。わたしがづくりあげた、このまったりした世界は絶対にこわしたくない。わたしの世界、そこに住むのはわたしの体と鏡。アレックスサンドラの質問に、そうよ、って答えると、その世界にそむくことになる。

ほんとうに気持ちよくなれるのは、見とれていつくしむ自分の姿だけ。残りはすべて、にせもの。偶然から生まれて、なあなあなかで育つ友情もにせもの、深さなんかない。学校の何人かの男の子に照れながらあげたキスもにせもの。くちびるをあてたとたん、いやあな気持ちになって、男の子が舌をぶきつちよに入れてくると遠くに逃げてしまいたくなる。今の心とか離れたこの家にもせもの。いきなり凍えるような冷たい風が窓から入ってきて、絵がすべて壁からぱらぱらとはがれ落ちるといい。コオロギの鳴き声が、犬の遠ぼえに変わってしまうといい。

ダイアリー、愛したい、愛されたい。心の溶ける音が聞きたい。鍾乳石みたいな心の氷が砕けて、美しい情熱の川となつてあふれるところを見たい。

2000年

7月8日

夜8:30

道のほうがさがわがしい。うだるような夏の空気が笑い声でいっぱいになる。出かける前に、同い年の子たちの目を思いうかべる。楽しい一夜にしたくてたまらない、興奮で生き生きした目。ギターに合わせて歌い、夜通しビーチで過ごすんだろう。しまいはグループを離れる子たちが出てきて、すべて闇に覆われた場所で、いつまでもささやき合う。翌日、早朝の太陽に

あたためられた海で泳ぐ子もいる。見知らぬ生き物を息づかせるあの海で。あの子たちは生きる。自分の人生をどう運べばいいのか知っている。もちろん、そう、わたしも息をしている。生き物としてはまともだ。けれど、こわい。家の外へ出て、知らないまなざしに会うのがこわい。そう、わたしは自分とずっと闘っている。手をさしのべてくれる子たちの中にいて、そうしてもらわないではいられない日もある。まったくひとりでいることでしか落ち着けない日もある。そんな日は悪いけどベッドから猫を追い出して、あおむけになって——CDを鳴らす、たいていクラシックの。音楽に助けられて、気分はよくなる。あとは何もいらない。

こんな外のさわがしさには逆に悩まされる。今夜、わたしより多くのことを経験する子がいるだろう。わたしはこの部屋にこもって、生活の音を聴く。眠りに抱かれるまで聴いている。

2000年

7月10日

10:30

今考えてること、わかる？ ダイアリーをつけはじめたのは、失敗だったかも……。自分がどういう子か、自分のこと、わかってるから。何日かたったら鍵をどこかに置き忘れたり、自分が考えてることにむかついて、自分から書くことをやめてしまったりするかも。あるいは（そんなことありえないけど）、あのずうずうしい母がこれを盗み見て、そしたら自分で自分が

ばかみたいに思えて、書くのをやめてしまうかも。

自分のほんとの気持ちを吐き出すのがいいことかどうか分からないけれど、少なくとも気はまぎらせられる。

7月13日

朝

ダイアリー、

最高！きのう、アレックスサンドラとパーティーに行った。彼女はハイヒールをはいて背が高くなって、いつもどおりきれいだったけれど、表情やしぐさはいつものとおりちよつとがさつでも、情は深くて優しい。最初は行きたくなかった。パーティーが退屈だからというのが少し、昨日は暑さでまいってしまってなんにもしたくなかったというのが少し。だけど彼女から、お願いだからいっしょに来て、って頼まれてついていった。スクーターに乗って、唄いながら郊外の丘を飛ばす。夏の焼けるような暑さが、緑に生い茂った丘を、乾いて色あせた丘に変えてしまった。ニコロージと広場のお祭りで合流した。夜、冷えてきて生あたたかくなったアスファルトの上に、キャンディーやドライフルーツの露店がたくさん出ていた。家は、明かりのない小路のつきあたりにあった。門の前まで来ると、誰かにあいさつするみたいに腕を伸ばして、

アレックスサンドラが大声で呼んだ。「ダニエーレ、ダニエーレ！」

彼はゆったりとした足どりで歩いてきて、彼女に声をかけた。暗くてよくわからなかったけれど、かなりかつこよさそうだった。アレックスサンドラがわたしたちを紹介すると、彼はそっと握手した。ささやくように名前を言うから、照れ屋なんだと思つて、ちよつとおかしくなつた。そのとき、闇の中で何かきらきらするものに気がついた。驚くほどぴかぴかしている、真っ白な彼の歯だった。そこでわたしは彼の手をぎゅっと握り返して、ちよつと大きすぎるくらいの声で言った。「メリッサよ」彼はわたしの歯に気づかなかつたみたい。彼のほど歯は白くないけれど、きらきら光るわたしの目は見てくれたような気がする。家へ入って明かりの下で見ると、彼がもつとずつとかつこいいのに気がついた。わたしは彼のあとについて、歩くたびに彼の背中の筋肉が動くのを見ていた。一メートル六〇センチのわたしが小さく感じられて、彼の前ではぶさいくに思えた。

リビングのソファアに座ると、彼はわたしの前でビールを飲みながら、わたしの目をじっと見つめた。その瞬間、自分のひたいのニキビや、彼にくらべて白すぎる肌が恥ずかしくなつた。高くてバランスのいい彼の鼻はギリシャ彫刻みたいで、手の甲に浮きあがつた静脈が強さをひきたたせている。濃いブルーの大きな目は、わたしを見くだすように見つめていた。いろいろきかれたけれど、彼はわたしのことには無関心。それでもわたしはめげるところか、やる気が出てきた。

彼は踊るのが好きじゃなかった。わたしもそう。他の子たちが飲んだりはやいだりするあいだ、ふたりきりになった。

おりてきた沈黙をつくろいたかった。

「この家、すてきね」確かにそう思っているふりをした。

彼は肩をすくめただけで、わたしはおかしな子と思われなくて口をつぐんだ。

そして、あのつつこんだ質問がやってきたのだ。みんなが夢中で踊っているとき、彼はわたしの椅子にぐっと体を寄せ、につこりしながらわたしの目を見つめた。暗闇の中でふたりつきり、かなり親密な感じだ。そうしてきかれた。「ねえ、バージン？」

顔が真っ赤になり、胸がつまって、頭にたくさんのピンが突きささった感じだった。

うん、とおずおず答えると、彼はそっぽを向いて、わたしのどぎまぎを拒絶した。くちびるを嚙んで笑いをこらえ、コホンと咳払いをして、彼はひとことも口をきかなくなった。わたしは心の中で、強く激しく自分を責めた。「これでもう相手にされないわ！　ばかね！」だけど、結局は何が言えただろう、本当のことだもの、わたしがバージンなのは。自分以外の人に触れたことは一度もないし、そのことには誇りを持っている。だけど好奇心はある、大いに。いちばんの興味は、男の人の裸を知りたいということ、今までそういうチャンスがなかったから。テレビでヌード・シーンが流れると、父はすぐにリモコンをつかんでチャンネルを替えてしまう。今年の夏、バカンスに来ていたフィレンツェの男の子と一晩過ごしたとき、彼が手を

置いたあそこに、わたしは思いきって触れることもなかった。

それに、わたしは自分以外の誰かから快感をもたらしてほしい、その人の肌にわたしの肌をくっつけてみたい。そうして、顔なじみの同い年の女の子たちの中で、性的体験をする最初の子になりたい。彼はどうしてあんな質問をしたのかな？ はじめてのときがどんなふうかまだ考えたことはないし、たぶんこれから考えることもない。ただ経験してみたいだけ。できれば、人生のいちばん悲しいときにもそっと寄り添うような、永遠にすてきな思い出になるといいな。おそらくその相手は彼、ダニエレ。いくつかのことから、そうピンと来たの。

昨晚、電話番号を交換したら、夜、眠っているあいだにメッセージをくれた。今朝、それを読んだ。「君といると、とてもなごめた。かわいい君にもう一度会いたい。明日、家においてよ。プールで泳ごう」

19:10

どきどきして、どうしていいかわからない。数時間前まで知らなかったことを経験した衝撃はかなり強烈。むしろが走るほどではなかったけれど。

一戸建ての彼の別荘はとてきれいで、緑の庭と色とりどりのあざやかな花々に囲まれてい

た。プールのプールに陽の光がきらめいて、飛びこんでおいで、と水が招く。だけど、今日は泳げなかった、あの日に当たってしまったから。わたしはしだれ柳の下で竹の小さなテーブルに座って、アイステイーのグラスを持ったまま、他の子たちがもぐったりじゃれたりするのを見ていた。彼はときどきわたしを見つめてにこっとし、わたしは嬉しくてほほえみ返した。彼がプールののはしごを上り、水をしたたらせながら近づいてきた。つやめいた彼の上半身を、しずくがゆつくりとすべり落ちる。しぶきを飛びちらせながら、彼は濡れた髪を手でかきあげた。「楽しめなくて残念だな」ちよつと皮肉っぽく彼が言った。

「だいじようぶ」わたしは答えた。「少し日を浴びるから」

彼は黙ったままわたしの手をとると、もう一方の手でわたしのアイステイーをつかんでテーブルの上に置いた。

「どこ行くの？」にこにこしながらたずねたけど、ちよつと不安だった。

彼はそれには答えず、十段ほどの階段の上にあるドアの前までわたしを連れていった。ドアマットをずらすと、鍵を手にとった。それを鍵穴にさしこみながら、何かをたくらんでいるみたいに目をきらきらさせてわたしの顔を見つめた。

「どこへ連れていくの？」最初に感じた不安をじょうずに隠しながらきいた。

またも答えはなくて、プツと吹き出しただけだった。彼はドアを開けて、わたしを引きずるようになかに入り、後ろ手にドアを閉めた。よろい戸のすきまからもれる光にわずかに照らさ